

07-09さんぽ事例検討①

インタビュー情報

- 日時：2026-07-09 09:59:13
 - 場所：[ワンステップ]
 - インタビュアー：田中さん・倉光さん（講師）
 - インタビュイー：辻さん（事例提供者）、および支援スタッフ数名
-

見解

1. 対象者（大口さん）の基本的な興味・好み — 辻さん・スタッフ

- 特定の人への愛着と多様な興味関心

大口さんは特定の人に対して非常に人懐っこい一面を持つ。好きなものとして、ウルトラマン・サメ・恐竜・ポケモン・電車・飛行機・虫・水族館・USJなどが挙げられた。虫は見るだけでなく触るのも好きとのこと。また、お絵描きや工作なども好む。タブレットを使って好きな生き物や魚を自分で調べる行動も見られ、興味の幅は広く、視覚的・体験的なものを好む傾向がある。

2. 健康面・医療的配慮 — Speaker 1・佐伯

- 腸の奇形による排泄困難と腸閉塞リスク

幼少期から腸に奇形があり、本来であれば手術が必要な状態だったが、障害があるため手術ができなかったとのこと。そのため毎日下剤を服用している。腸閉塞になるリスクが高く、過去に緊急入院した経験もあり、本人・支援者ともに非常に注意を要する状態である。入院自体が大きな負担となるため、日常的な管理が重要とされている。

- 脂肪肝・尿酸値の高さと服薬管理

健康面では脂肪肝および尿酸値の高さが最近確認され、服薬が開始された。食事制限は難しい状況であり、薬でコントロールする方針となっている。また、リスペリドン（抗精神病薬）を朝に服用しており、一時期は眠気が強く車内で眠ることもあったが、薬の調整後は現在は安定して覚醒できている。

3. 家族関係 — Speaker 1・Speaker 3

- 家族仲は概ね良好、姉との口喧嘩が課題

祖母が大好きで、母親がキーパーソン。父親は単身赴任中だが、母・父ともに大口さんが非常に頼りにしている。姉もB型事業所に通っており、2人とも障害がある。姉との間では時々激しい口喧嘩が起きており、「殺してやる」などの激しい言葉が出ることもある。これが施設での言動に影響している可能性も示唆された。全体的に家族関係は良好と評価されている。

4. コミュニケーションの特徴 — Speaker 1・Speaker 2・Speaker 3

- 滑舌の悪さと一方的な会話スタイル

言葉でのコミュニケーションはある程度可能だが、滑舌が悪く聞き取りにくい。慣れた職員でも聞き取れないことがあり、聞き取れないと本人が手を出すこともある。会話は2語文程度で、「サメの何々よ」といった一方的な発信が多く、双方向のやり取りよりも自分の興味を一方的に話す傾向がある。文字の理解は模様・絵として覚えている程度で、書字は難しい。映像・実物による理解の方が得意。

- めいぐるみを介したコミュニケーションツールの活用

利用者はペンギン・ライオン・ハリネズミなどのめいぐるみを毎回持参し、それを使って職員と人形遊びのようなやり取りをすることがある。めいぐるみに声を出させたり、声色を変えたりしながら関わってくれる職員が特に好きなのである。ただし、このめいぐるみを使ったコミュニケーションに対応できる職員は一人に限られており、全員に同じ対応を求めるわけではないが、有効なコミュニケーション手段として認識されている。

5. 日中活動の流れと支援の工夫 — Speaker 1・Speaker 2・Speaker 3・佐伯

- 本人発信を尊重しながらのスケジュール設定

当初はスケジュールを設定しても破り捨てられ、本人発信のみで6時間を過ごし職員が疲弊する状況だった。その後、「職員側がスケジュールを提示し、本人が乗ってくるかどうかは本人任せ」というスタイルに変更。9時半到着後、10時からラジオ体操（乗らないこともある）、11時からパズル（職員とマンツーマン）、12時から昼食・タブレット、13時から工作・造形などを提案している。

- 本人が自ら活動を選択できる環境づくりが必要

現状では職員側がスケジュールを作成・提示している状態であり、本人が「何をしたいか」を自分で決められていない。工作の種類を選ぶ、検索をするなど、興味の

ある活動の中から選択肢を提示し、本人が選んで取り組む流れを作ることが重要であると述べられた。選択肢を自分で選ぶ経験を積み重ねることで、主体性を育むことができると考えられている。

- **一人で過ごす時間の創出という課題への取り組み**

大口さんは常に職員を会話に巻き込もうとする傾向があり、職員が疲弊する一因となっていた。そこで「職員同士の話し合い（大人の話）」という名目で、13時半頃に職員が別室に集まり、本人が一人で過ごす場면을意図的に設定するようにした。最近では本人にも徐々に伝わってきており、一人で過ごせる時間が増えつつある。タブレットを使った自由時間であれば30分程度一人で過ごせることも確認されている。

- **短時間で完結できる活動設計の重要性**

興味のある活動があっても、完成まで1～2時間かかる場合は途中で諦めてしまうため、2～3分で終わる小さな活動単位を積み重ねる方が効果的であると議論された。午前・午後にそれぞれ複数の小活動を設けることで、1日全体として充実感を得られる構成が提案された。短い成功体験の積み重ねが本人の自信と継続意欲につながるという考え方が共有された。

- **活動と対人交流の関係**

対象者は、塗り絵や自然観察など一人で取り組む活動よりも、職員とのやり取りそのもの楽しさを見出していることが語られた。職員が描いた絵に対象者が色を塗る形式が定着しつつあり、完成した作品を職員や来客に見せることで達成感を得ている。「できたよ」と伝えるコミュニケーションが本人の満足感につながっており、作品を飾ることや来訪者からの称賛が次の活動への動機づけになっている。

6. 他害行動の軽減と意思疎通の課題 — 佐伯

- **他害行動が起こる状況と軽減への取り組み**

意思疎通がうまくいかない時に他害行動が出ることがある。特に、自分が見たい画像や動画を検索してもらいたい時に要求が伝わらないと気持ちが高ぶりやすい。利用者はサムネイルを見て動画を選ぶことはできるが、ゼロからキーワードを入力して検索することはできないため、職員に依頼する場面が多い。他害行動をゼロにすることが理想だが、まずは頻度を下げ、より軽度な表現で我慢できるようなラインを目指したいと考えている。

- **利用者のタブレット活用と得意なこと**

利用者はタブレットのスクリーンショットを自分で撮影し、自分が集めた画像を見て過ごすことが得意である。動画のサムネイルを記憶しており、自分で動画を選ぶ

ことができる。恐竜やジンベエザメなど特定のテーマに強い興味を持っており、これらを活動に取り入れることが有効である可能性がある。

7. 来所目的と本人の思い — Speaker 2・Speaker 3

- **利用者が来所する主な動機**

利用者が施設に来る主な目的は、好きな職員とおしゃべりをしたいという気持ちと、「行かねばならない」という義務感であると分析されている。体調が悪くても休もうとしない特性があり、お母さんからの言葉もあって来所を続けているようである。こうした本人の思いを踏まえると、現在の過ごし方はある意味では本人のニーズをほぼ満たしているとも言えるが、支援側としてはより自立した活動への移行を目指したい状況にある。

8. 本人の好きな行動を活動として組み込む支援アプローチ — Speaker 2

- **不適切とされていた行動を「お仕事」として再定義した支援事例の紹介**

過去の支援事例として、本人が自分勝手にやっていた洗剤の確認や棚を開ける行為を「点検作業」として活動スケジュールに組み込み、本人が自分でやりたいことを全てスケジュールに入れてチェックする形にした取り組みが紹介された。「今日はあなたがしたいことができた1日」と肯定することで、本人の充実感につながったと述べられた。

- **本人の好きなことを活動に組み込み、充実感を持てるスケジュール設計**

検索タイムやおしゃべりタイム、お人形タイムなど本人が楽しめる活動で1日を埋めることも有効であると提案された。本人がここに来たら楽しかったと思えるような充実感を具体的に設計することが大切であり、こちらから「お願いね」と我慢を強いるよりも、本人の思いを中心に据えた活動構成が支援の質を高めるとされた。

- **我慢を求める際には代替となる楽しみの提案が不可欠**

本人に何らかの我慢を期待する場面では、それに代わる魅力的な提案を用意することが不可欠であると強調された。「これはできないけど、これがある」という形で、本人が今なら良いと思えるような楽しみを並行して提供することで、自然な流れで行動を切り替えられる環境が生まれると述べられた。

9. 「一人で過ごす」ことの目的についての共通認識 — 田中・Speaker 3

- **支援者間の認識のギャップと統一の必要性**

「一人で過ごしてほしい」という支援側の意図と「一人でいたくない」という本人の気持ちのギャップを支援者全員がどのように共通認識しているかが重要であるという問題提起がなされた。認識がバラバラだと、関わりを続ける職員と距離を置く職員が混在してしまう恐れがある。「一人で過ごしてほしい」のではなく「本人が興味を持って一人でできることを増やしたい」という考えが示され、チーム全体で方向性を揃えることの重要性が強調された。

- **自立してできることを増やすという目標の共有**

「一人で過ごす時間を作る」ことを目的とするのではなく、「本人が一人でできることの量・種類・時間を増やしていく」ことを目的とすることが確認された。結果として一人で過ごせる時間が増えることは望ましいが、それはあくまで副次的な結果であり、本人のできることを広げることが本質的な支援目標であるという認識がチームで共有された。

10. 職員会議時間の活用と感謝・お願いのルーティン化 — 佐伯・Speaker 2

- **職員会議の時間を「一人で過ごす練習」として活用する試み**

職員が会議中であることを本人に伝え、その時間を一人で過ごすことに慣れてもらうための実践が行われていることが語られた。当初は視覚的な合図で会議開始を示していたが、最近では口頭のみでも理解できるようになってきた。会議があるかどうかを本人が気にして尋ねる様子も見られ、見通しが持てるようになってきたと評価されている。

- **感謝・お願いの言語化によるルーティン化**

会議開始前に「お願いします」、終了後に「ありがとう、終わりました」と声かけすることを習慣として取り入れていることが紹介された。本人が協力してくれた際には感謝を具体的に伝えることで、ルールへの理解と受け入れを促すアプローチが提案・実践されている。

11. マンツーマン支援の限界と職員体制の課題 — 佐伯・Speaker 1

- **特定職員への依存と支援の持続可能性の問題**

利用者が特定の職員でなければ帰れない・落ち着けない状況が続いていたことが説明された。職員が病気・怪我・代替対応でやむなく交代した際に暴力を受けるリスクがあり、職員の心が折れる状況になっていたと述べられた。理想は誰でも対応できる職員を増やすことであり、一人の時間が少しでも確保できれば送迎も複数の職員で対応可能になると述べている。

- **支援の転換点と初期ミーティングの経緯**

配置できる職員がいない状況でピンチヒッターとして昼休みに入った際、利用者がほとんどやり取りをせずに一時間過ごせたことに驚いたエピソードが語られた。

「一人で過ごせないと思っていた」という職員全員の思い込みが崩れたこの体験が、初期ミーティング開催のきっかけとなり、スケジュール支援や現在の体制づくりへとつながった。現在は常勤職員3名で配置し、安定した支援が提供できていると述べられた。

12. 支援の方針と利用者にとっての「幸せ」の定義 — Speaker 2

- 一人で過ごせることが必ずしも目標ではないという視点

常に誰かがそばにいてくれることが本人の安定につながるケースもあり、無理に一人にさせることで状態が悪化するなら、そのサービス形態が適切かどうかとも再考すべきだと述べられた。最終的にマンツーマンの関わりが本人にとって最も幸せな形であれば、それを前提とした生活設計を考えることも一つの選択肢であるとされた。

13. 家族（保護者）との関係における困難と対応 — Speaker 1

- 保護者への報告・相談が逆効果になりやすい状況

施設での気になる行動を保護者に相談すると、「一人にさせているからだ」などと逆に責められるケースがあり、職員が精神的に追い詰められる状況が生じていると述べられた。その結果、テレビや物品の破損なども保護者に伝えられず、連絡帳にも良いことしか書けない状態になっているとされた。

- 保護者の意向が一貫せず、計画の実行が困難

外出活動を計画しても家族が最終的に中止にするケースや、面談後にLINEで別の要望が届くなど、保護者の意向が場面や時間によって変わることが支援計画の実施を難しくしていると述べられた。

- 成功事例の積み重ねによる保護者との信頼関係構築

保護者に対して否定的なフィードバックをするとすぐに感情的になるため、まずはこちらでの取り組みの成功例をコツコツと積み上げ、「一生懸命やってくれている」という印象を持ってもらうことから信頼関係を築いていくしかないと述べられた。エビデンスをもとに丁寧に伝えていく姿勢が重要とされた。

結論

本一連のミーティング・インタビューでは、支援対象者（大口さん）への多角的な支援方針が議論された。対象者は腸の奇形による健康管理上のリスクを抱えながら、タブレットや工作・恐竜・サメなど視覚・体験的な活動に強い関心を持つ。コミュニケーションは一方的になりやすく、職員を常に巻き込もうとする傾向があるため職員の疲弊が課題となっていたが、「本人発信を尊重しつつ職員側がスケジュールを提示する」スタイルへの転換と、「職員会議」という場面設定を通じた一人で過ごす時間の段階的拡大によって改善の兆しが見えている。

支援チーム全体で「一人で過ごさせる」ことを目的とするのではなく「本人が一人でできることの量・種類・時間を増やしていく」という目標を共有することが最も重要であるという共通認識が形成された。本人の強み（数への興味、動物・恐竜への関心、スクリーンショットの活用、ぬいぐるみを介したコミュニケーション）を活かした活動をスケジュールに組み込むこと、そして我慢を求める場面では必ず代替の楽しみを用意することが、自立的な活動時間の拡大につながる可能性があると確認された。保護者との関係については、直接的なネガティブフィードバックを避け、成功事例の積み重ねによって段階的に信頼関係を構築していく方針が示された。

今後の対応

- [] 1. 支援者全員で「本人が一人でできることを増やす」という支援目標の共通認識を統一する
- [] 2. 本人が活動を自分で選択できるスケジュール（選択肢提示型）の作成に着手する
- [] 3. 本人の好きな行動（検索・おしゃべり・お人形・工作・数を数えるなど）を正式な活動として組み込んだ1日のスケジュール案を設計する
- [] 4. 午前・午後にそれぞれ2～3分で完結できる小活動を複数設け、達成感を積み重ねる支援を継続する
- [] 5. 検索支援の方法（よく使うキーワードの整理など）を検討し、意思疎通のしやすい環境を整備する
- [] 6. 他害行動の軽減に向けて、意思疎通がうまくいかない場面でのアプローチ方法をチームで整理する
- [] 7. 職員会議時間を活用した「一人で過ごす練習」の効果を観察し、定着状況を継続的に評価する
- [] 8. 会議開始・終了時の「お願いします」「ありがとう」の声かけルーティンを継続し、本人の理解促進を図る
- [] 9. 施設での支援の成功事例を記録・蓄積し、保護者への段階的な情報共有の材料として整備する
- [] 10. 保護者との面談・連絡の方針（肯定的な情報発信を中心とする）を職員間で共有・統一する
- [] 11. ミーティング後に約30分のアイデア出しセッションを実施する

- [] 12. 利用者が頑張れた場面・落ち着いた場面を本人にポジティブフィードバックとして伝える取り組みをコツコツと続ける

AIからの提案

録音トランスクリプト全体を通じて、いくつかのインタビュー・質問における改善点をまとめてお伝えします。

質問の具体性について：「他にこの方について知っていることはありますか」「健康面は特に問題ないですか」といった広範な質問は、焦点を絞りにくい状況を生じさせていました。「健康面で日常の支援において特に注意が必要な点は何ですか」のように、具体的な場面を示して尋ねることで、より実践的な情報を引き出しやすくなります。また、「意思疎通がうまくいかない時に他害行動が出る」という発言に対しては、「具体的にどんな言葉や行動があった時に手が出ましたか」「その直前に本人はどんな様子でしたか」のように、行動直前の状況まで掘り下げることが有効です。

質問の構造化について：「コミュニケーション面」「健康面」「活動面」などカテゴリを明示した上で順に質問すると、情報の整理がしやすくなります。また、「30分持続しますか」という確認的な質問に対して得られた回答には、「その30分を維持するために、どのような工夫をされていますか」といった掘り下げの質問を加えることで、支援の具体的な手法についてより深い情報が得られます。

本人視点の深掘りについて：「本人、ここに何しに来てるんですかね」という問いかけは本質的な視点を引き出す良い質問でしたが、続けて「本人が一番困っていることは何だと思いますか」「本人の立場から見ると、今の支援で何が足りないと感じているでしょうか」といった問いを意識的に加えることで、支援者中心ではなく本人中心の議論をより深められます。

****収束型の問いについて：****複数の方向性が並行して語られる場面では、最後に「今日の話し合いを踏まえて、まず最初に取り組むべきことは何だと思いますか？」のような収束型の問いで締めくくると、合意形成がより明確になるでしょう。また、「到達点」についての重要な発言が出た際には、「その到達点に向けて、現時点で最も手をつけやすいステップはどこだとお考えですか？」といったフォローアップの問いを加えることで、理想論で終わらず具体的な行動計画につながる議論が生まれやすくなります。

過去の取り組みの掘り下げについて：「今までどういうのをやってこられましたか」という質問に加えて、「その活動がうまくいかなかった時、本人はどんな反応を見せていましたか」「職員側はどの時点でやめると判断しましたか」といった失敗の経緯や判断の根拠を丁寧に掘り下げること、今後の活動提案の精度を高める重要な示唆が得られます。